

研究報告

上磯ハリストス正教会（北海道・北斗市）と日露戦争 ～明治期の近代化とハリストス正教会の役割～

島津 彰

北翔大学北方圏学術情報センター学外研究員

抄 録

日本においてキリスト教の禁教が解かれた直後の明治期に、一農村に成立したハリストス正教会（ギリシャ正教、ロシア正教との呼称もある）の歴史を社会的な事象の中で俯瞰する。教会創立の根底には深い信仰がある事は言うまでもないが、キリスト教への理解が十分でない明治初期に、因習の残る農村地帯で教会の基盤を作り、幾多の困難を乗り越えて発展を遂げ、特に日露戦争時には敵国の宗教とされていた逆境を逆手にとって、日露戦争の俘虜への信仰慰安事業に参加し、俘虜への国際法を遵守する中で、日本の近代化の一翼を担い日本の結んだ不平等条約解消への役割を果たした正教会の活動を検証する。

この検証は異なる宗教・文化に対して自国中心主義が勢いを増している世界にあって、マイノリティの立場の人々の自国の発展への寄与を顧みる時、多様性が実は豊かさを保障するものである事に気づく。同時に他宗教・他文化に属する人々が取り組んでいる事象の本質を冷静に見つめる事の大切さを示唆する。

キーワード：正教会、ニコライ日記、正教新報、日露戦争、露探、俘虜、近代化、北斗市

I. 上磯ハリストス正教会の成立

1. 上磯ハリストス正教会の誕生

日本に於けるハリストス正教会の始まりは、日露修好通商条約（1858年・安政5年8月）に基づき函館に開設されたロシア領事館（初代ゴシケヴィッチ領事）付司祭のフィラレートの着任（9月）に始まる。その後函館ハリストス正教会（以下、函館正教会）は2代ワシリイ・マホフ、3代聖ニコライ、4代アナトリー・チハイへと司祭の異動があった。4代アナトリー・チハイは明治5年に着任するが、上磯（現北斗市。当時は有川村、教会は有川教会と称す）への伝導が本格化するはこの時期である。すでにイギリスの聖公会のデニング氏が布教活動を始めていたが、なかなか定着しない時代であった。

上磯ハリストス正教会（以下は上磯正教会）の創立は、明治8年（1875年）12月に有川村に函館正教会の五十嵐伝教師により、講義所が置かれたのが端緒である。

日本正教傳道誌巻之貳・第参編¹⁾に、次のように記述

されている。

『第貳章（有川村の傳道並びに教會の創立）』

「有川村は函館を去る三里の近村なるが、この村落に函館教會の信徒キリル大村（徳松）の親戚なる、大村萬助（佐藤由助事、後・イラアン）なるものありしかば、キリル大村はこの親戚に主の福音を傳へんとて傳教師ダミアン五十嵐と図り同村の布教に着手せり。

元來この村落は新教派宣教師デニングの嘗て布教を試みたる村落にて、ダミアン五十嵐の始めて出張したる頃（一千八百七十五年頃）には、既に新教派の傳教によりて、主の名は当村に聞こえたりしも、未だ村民の信仰を喚起するに至らざりき。ダミアン五十嵐は同村に出張し、大村の宅を以て講義所と定め、其家人に福音を聞かんとて、大村方に會合せり。彼等は、此時始めて正教の講義を聞きたりしが、其後ダミアン五十嵐は、嚴冬風雪を冒して、同村の傳道を任じ、遂に其一千八百七十六年（明治九年三月）に至りて、イオアン大村・ペトル田中・パウエル寺澤の三人は至聖三者の名によりて領洗せり。それより当村の初實の果たるこの三人の信徒は、各々その家族と知人とを導き、次第に信徒の数も増加せ

り。」と創立の様子を伝えている。

明治6年2月24日の切支丹禁制の高札の撤去（キリスト教を黙認する形）の間もない農村にハリストス正教がなぜ伝わったかについては、信仰への熱心さは別として、最初に親戚への伝導、続いて地縁で結ばれている人との繋がりが濃厚であった事は想像に難しくなく、日本の初期の切支丹が村全部で入信した状況と似ている。明治9年の最初の受洗者、イオアン大村萬助（佐藤由助）、ペトル田中西松、パウエル寺澤万之助らが中心となり基礎を築き、また東京から聖ニコライが有川に逗留（明治14年）して熱心に布教し、シモン坂下兼、ニコライ立花栄太郎、ゾシマ馬場三之助らが受洗するに到り広がりを見せた。

2. 上磯正教会初代会堂の建設

信者が増えることにより、個人宅では手狭になり會堂の建築へと進んでいく様子が前掲の『第貳章（有川村の傳道並びに教會の創立）』¹⁾に記載されている。

「ダミアン五十嵐は、既にこの村に多少の信徒現はれたれば、信徒相會して祈禱をなすの會堂なからざるべからざるを認め、この事を信徒に述べたる、信徒等も亦會堂の必要を感じたるも、少数の信徒なれば、いかんとも為し難かりしが、ダミアン五十嵐は信徒に向かひ左の事を相談せり。曰く『兄弟よ、我等は相會して主・神に祈らんがため、小なる會堂なりとも速に設けざるべからず、されど兄弟等は何れも農業を営む人々なるを以て、直接に金銭を教會に献ずるは或は難からん。故に各自その田畑より収穫する所の、米穀の幾分なりとも、教會のために積み、會堂建築の準備をなすべし、又兄弟等・所有の山林には、家屋の建築に供するを得るの樹木もあらん、されば樹木を伐採して木材の準備をなすも可なる可し云々』と。これより有川村の信徒は、各自毎月糶一升に金若干を積み、會堂建築の準備をなし、後年この村落に一小會堂を建て、神を讚美するの聲を聴くに至りたり。會堂建築の敷地は、當會の女徒等が函館教會の女性の協力を得て、購ひ得たるものにて一千八百八十四年に傳教師パウエル松本當會叙任の際に、東京の信徒よりも多少の助力を得、一字の會堂を建築するを得たり。この會堂の建築には函館教會の大工を業とするアレクセイ浦川最も尽力し、自ら六十圓余り手間を献じ、またエレナ酒井・スサンナ媚山其他の婦人の内助の尽力甚からざりき。ダミアン五十嵐の後に有川村に傳教したるは、アレクセイ山中・イオアン酒井等にして、後には函館教會在任の傳教師は、何れも當村の布教を任せり。イオアン酒井が有川村に傳教中、信徒は村民より非常なる迫害を蒙り、會堂に乱入せられたる事などありしが、今は全くさる事もなく、一小教會なるも依然たる教勢にて、信徒は

その信仰を保ち、教會の風俗をも守れり。」と当時の状況が記述されている。

日本におけるキリスト教は、豊臣秀吉以来の禁教（北海道では松前藩による大千軒岳の切支丹処刑）から、「切支丹禁制の高札の撤去（黙認の形）」までの長い弾圧の時代が続いていただけに、ただちに受け入れられる状況ではなく前掲の『村民より非常なる迫害を蒙り、會堂に乱入せられたる事』の記述は、上磯正教会の歴史の中で時々みられる受難の最初である。この事について、13代目の管轄司祭である厨川勇神父のメモには、教會発足当時は、夕刻農道を歩いている信徒めがけ、石が飛んできたり、学校ではなにも悪さをしないのに、信徒の子弟であることを理由に廊下に立たされたなどの嫌がらせがあった等の信者の語りが記録されている。

明治17年4月15日に完成した初代会堂（写真1参照：有川昇天會堂：小松韜藏神父による聖成）の建設にあたり、その費用捻出の為に、毎月糶1升を提供したと「上磯ハリストス正教会120年史」²⁾は伝えている。決して豊かではない時代の中で、主要な部分は道産のヒバ材を使っているなど、會堂建設への熱き想いの記録である。

函館正教会の信徒も大いに支援を行い、建設を請け負ったアレクセイ浦川要作は工賃90円を献納した。かなりの高額で当時の大工の工賃の166日分に相当し、1,350kgの米の値段に相当する。また、會堂の整備で貢献したのがエレナ酒井あいで、内装や家具などを整えるために、函館教會の婦人部の中心となり金品を献納した。

なお、あいの夫は聖ニコライから洗礼を受けた、日本で最初の信者の一人である酒井篤礼である。篤礼は宮城県出身で、大阪の緒方洪庵の適塾に学んだ俊才であり、1878年に司祭に叙聖され日本ハリストス正教会の発展のために尽力した人である。その娘・テサク澄も東京女子神学校の教師を務めるなど函館出身の逸材である。

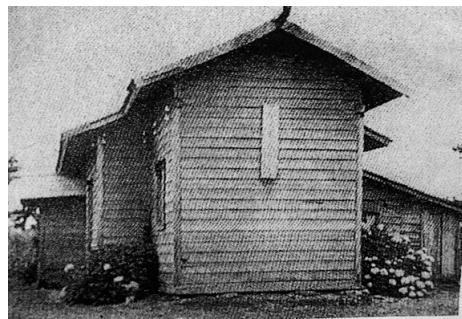


写真1 初代有川會堂

II. 日露戦争とハリストス正教会

1. 日露戦争前夜

日露戦争の足跡が近づくなか、大津事件に代表される「恐露病」の言葉の流行やロシアを仮想敵国とした軍事訓練（八甲田山雪中行軍遭難事件）が行われていた時代である。戦争が間近になった中、東京の正教会本会の聖ニコライの日記³⁾《1904年（明治37年）1月21日》は次のように緊迫した様子を伝えている。

「…数日前好戦的な大演説大会が開かれ、一人の弁士が「ニコライ」という演題で登壇し、日本のために私を退治しなければならぬと論じ始めたが、警官はその男の演説を止めさせた。私の身に危険が迫っているという話が根も葉もないうわさではないということは、次の事からも分かる。二日前夜中に、三十人の警官が教団の警護についた。その夜敵の連中が教団を襲撃して私を殺そうと計画していたからである。…」

当時の日本人はハリストス正教会を寸分違わずロシアの宗教であると見なし、敵国宗教と捉えていたことが背景にある。ちなみにカトリックはフランス、聖公会はイギリス、新教はアメリカと捉える傾向が強かった。

2. 要塞地帯法と目時神父の退却命令

日露戦争は不幸にも明治37年2月10日に開戦するが、その直前の8日に函館山要塞の直下にある函館正教会のアンドレイ目時神父、村木伝教者らは、二十四時間以内に要塞地帯から上磯正教会への強制立ち退きを受けたのである。これは明治32年7月に公布された「要塞地帯法」に基づくもので、要塞司令部の判断で要塞に関する機密を守るために、退去を含めた措置を可能にするものであった（要塞地帯法第八条）。

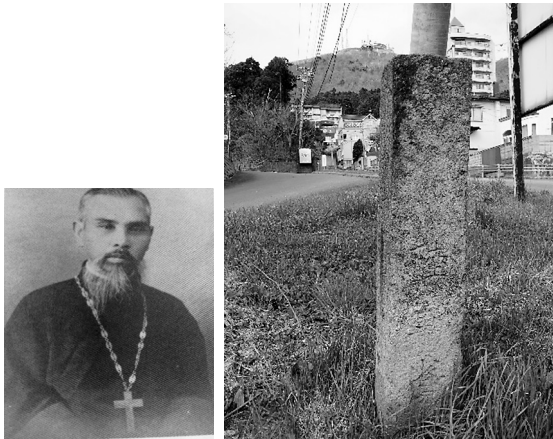


写真2 目時神父と要塞地帯を示す石柱（函館山登山口）

写真2は函館山登山口に現存する要塞地帯を示す石柱であり、函館正教会から約500mほど離れた所にある。

神父らの退去について、聖ニコライの日記《1904年（明治37年）2月12日》は記す。

「不安で動揺している教会を落ち着かせるため、信徒達に向けて教書を作成した。…新聞に次の事が出ていた。函館の我々の教役者たち、すなわち神父アンドレイ目時、伝教者イサイヤ村木、伝教者フェオドル豊田、そして高齢の掃除夫ニキタまでが、いやどうやら、教会所属の建物に住む者全てが、ロシアのスパイ（露探）だとされて住まいから追い出された。二十四時間以内に出て行くようにという命令が下った。どこへ？それが分からないのだ。…信者をみんなスパイだとして、あっちでもこっちでもこういう扱いをする。…」

退去命令の突然の出来事で、動揺を隠すことができない緊迫した様子が記述されている。

ニコライ主教の東京本会に逐次情報が伝えられたが、豊田伝教者が東京の本会に報告した内容が、「正教新報」⁴⁾（第558号：1904年（明治37年）3月1日発行）に「豊田伝教師退去始末」として掲載される。

「謹告 生等今回要塞地帯法第八條ニ依リ函館要塞司令官ヨリ地帯外へ退去ヲ命ゼラレ去ル九日肩書ハ立退キ候…」

渡島國上磯郡上磯村字中野百〇二番地正教会

司祭アンドレイ目時 伝教者イサイヤ村木

緊迫した状況について聖ニコライの日記は続く。

《1904年（明治37年）2月17日》

「内務省では、なぜ我々の函館の教会の者達が教団の建物から逐われたの知らないという。しかし、おそらく、函館は現在戦時態勢にあり、軍事当局は戦時用の非常命令を実施して、例えば要塞近辺の地理に詳しい者達を隔離する事もあるから、そのせいではないかという。教団の建物は軍事施設の建てられている山の直下にあるのだ。…」

《1904年（明治37年）2月21日》

「…函館近郊の有川からアンドレイ目時神父が次のように手紙で知らせてきた。函館には不安動揺がひどく、すっかり怯えた何人かの信者達は教会を捨てた、『脱会した』という。教会に集まることも廃止になった。また、函館はロシア軍艦による攻撃と猛砲撃があるという不安が高まって、そのために家族共々町を逃げ出した人が沢山いた。…正教徒の信者の呼び方は、ロシアの名前と結びついているから、この状況ではもちろん信者達は楽なはずはない。ところが目時神父の手紙によれば、有川の信者達は教会のために土地を買うことにしているという。この購入代金の半分は既に確保したという。目時神父は、函館の住民の頭の中では正教徒という言葉は口

シアとぴったりと結びついており、…と書いている。」

不安の中でも上磯正教会の人々の、土地を買う等の揺るぎない信仰の一端が記され、聖ニコライを勇気づけた事は疑う余地もない。上磯正教会内部でも、佐藤由助は牝牛一頭を教会に献じて、信徒同士の絆を深めたと「上磯ハリストス正教会120周年記念誌」²⁾は伝えている。

3. ロシアへの脅威

1) 露探

露探とはロシアのスパイを意味するが、一連の退去命令の背景には、正教徒はロシアのスパイであるとの疑いがある。実際、ハリストス正教会信者の高橋門三九がスパイ容疑で逮捕され、明治37年2月23日に懲役8年の判決を受けるなど実態を帯びた話であった。明治37年2月10日発行の「函館新聞（3面）」には次の記事が見られる。

「●露探!!! 賣國奴!!!（我函館の珍事）露國東洋侵略策の着々其歩を進むるや、…露國は探偵を各邦に放ちて…吾が邦人にして金が欲しさに露國の狗となりて…品性の下劣なる其の根性の野卑なる到底我が同胞として之を觀る可からざるのみならず昔ならば車裂さか磔けの極刑に処せるべきは…露探十七名一昨夜霹靂一下要塞地帯外に退去を命ぜられたる珍事なり…」

このような報道は世論形成に大きな影響を与え、特に正教会への印象を決定づけたと考える。また、同じ新聞の5面には、売国嫌疑者として正教会以外に十四名の退去者名が挙げられている。職業としては露國と関係のある、露語通訳、露領漁業者、貿易会社員（大町セメノフ商会）などである。その他として元英語学校教師、函館日々新聞主筆、古物商、回漕業など多岐にわたっている。その後も11日、13日と同じような報道が続く。

聖ニコライの日記《1904年（明治37年）3月4日》にも次の記事が見られる。

「…今日の『毎日新聞』に「流行の毒語－露探」という題の社説が載っていた。社説は「露探」という言葉を濫用する者達を批判し、我が教団と正教会を擁護している。…」

この社説は木下尚江が書いた記事であり、その書き出しは「頃日上州前橋なる一親友の來署に接せり、中に曰く『…近時小生をさして露探なりと吹聴するものあり、学校においても汝の父は露探なりと罵らるとて、娘共の帰り来つて泣き悲しむには、聊か閉口仕候』と、彼は極めて熱心なる非戦論者にして、又最も厳格なる正教徒なり」とある。親友とは前橋の深沢利重であり、戦争に対して比較的、協力的な姿勢であった日本の正教会の中で非戦の声をあげ、正教会の戦勝祈祷、軍への献金などを批判した人物である。

2) 島崎藤村「津軽海峡」に見る露艦への恐れ

島崎藤村は日露戦争の最中の明治三十七年七月、信州小諸から妻冬の実家（函館・秦家：旅の目的は小説「破壊」の自費出版への借り入れである。）への旅をし、津軽海峡を渡った経験を「津軽海峡」³⁾と題して同年12月に発表している。

同年の2月11日には浦塩艦隊により、青森沖で酒田から小樽に向かう途中の奈古浦丸が撃沈、さらには6月18日には松前沖に露艦出沒、7月20日には恵山沖で汽船高島丸が撃沈されるなど緊迫した様子の中での船旅であった。以下、島崎藤村の抜粋を記す。

「…浦汐（ウラジオ）の露艦が一度この津軽海峡を通過してから、太平洋沿岸に出没するというので、定期の航海はすべて断絶のきのうきょう、ただこの青森函館間ばかりは五六に以前から汽船の往来があるとのことでした。…それに露艦は伊豆の大島あたりを遊弋し居るといふ話で、昨夜はまた敵艦隊殲滅の噂が伝わりと同時に、或新聞社は号外を發した位ですから…。急に自分等は不安の念に襲われました。…それは太平洋沿岸に出没するという噂のあった浦汐艦隊で、大潤岬から龍飛岬の方角を望んで…次第に接近して、やがて彼我の距離が五海里程になると…先頭に「ロシア」－「グロンボイ」後れて、「リュウリック」…敵はあの帆船の清渉丸をすら撃沈して船荷と金銭とを略奪した…死－自分等は今その力の前に面と向かって立ったのです。…」と当時のロシアに対する庶民の恐怖の様子を伝えている。

3) 上磯正教会（有川教会）への迫害

目時神父が上磯正教会に退避した後は、初めて復活祭を教会暦どおりに祝うことができた喜びが、『「正教新報」（第562号：1904年（明治37年）5月1日発行）』に記載されている。

「○渡島國有川教會 当会は創立以来始めて大祭当日に正式的奉事を挙行せしこととて信徒一同非常なる満足にて…來会者凡そ五十四名…中々の盛會にてありき…」

その一方では、盛會の中でも世間の風当たりは強く、『「正教新報」（第623号：1906年（明治39年）11月15日発行）』によると、目時神父が函館ハリストス正教会の敷地より退去せられてからの有川教会における嫌がらせの記事が後日談の形式で見られる。

「各地方教会巡回日記（第五信：石川残月）…會堂の板壁に破穴三四あるは目時神父が戦役中當會に退去せられたる時暴民ヨリ石を投ぜられたるものなりとのこと。」

また、『「上磯ハリストス正教会120周年記念誌」²⁾では、日露戦争に関しダヴィッド・田中太郎談として「自分が小さい頃、教会へ行く時、近所の子供達から石を投げられたり、教会の橋が何回も流されました。教会での祈祷

の時、窓に石を投げられた事もしばしばありました。教会の親睦会で草葺きの家に集まっていると、外から木の槍で突かれ、怪我をした人もありました。そうした被害を警察に届けても無視されました。…」と子供時代の記憶を伝えている。当時、近隣の町村では日露戦争に於ける戦死者の葬儀（函館88名、上磯7名、大野8名と市町村史に記録）が町や村を挙げて行なわれており、正教会にとっては厳しい時代であった。

Ⅲ. 日露戦争への正教会の対応

ハリストス正教会が日露戦争に関してどのような対応したのか、二側面から考察する。「日本正徒信徒戦時奉公會」の活動の一環である「俘虜信仰慰安會事業」と「神父の俘虜収容所への派遣」の側面である。

日本に於ける俘虜の受け入れ状況は、陸軍省の『(軍事機密) 明治三十七八年戦役統計：第二十三編俘虜⁶⁾』によると、「日本にて29箇所の俘虜収容所に収容された俘虜の総数は七万二千四百十八名（十七歳～六十四までと幅広いが二十歳代が一番多い）である。…俘虜の取り扱いについては、国際慣例法を遵守し、必要なる法規を制定し、帝国陸海軍の規律に抵触せざる限り、努めて彼等の身辺を寛裕にし信教の自由を許し相当の礼遇を與えて博愛の主義を實にしたり…」と開戦以来、俘虜情報局を設置して情報を調査し、俘虜総数7万2千人強（陸軍が六万三千人でこの内四万四千人が旅順降伏、奉天会戦が2万人）の受け入れ態勢を整えていった。一般の日本人も、博愛の精神で接し、統計によると寄付金74万圓、他にたばこ百三十万本、たばこの包み四万個、扇子三万本、文房具から被服に至るまで多岐にわたる。

1. 「正教信徒戦時奉公會」の活動

このような中、「正教信徒戦時奉公會」と称して、戦争を遂行するために金銭や物品の提供及び奉仕活動を国家に供する組織を立ち上げた。開戦直後に話し合いがもたれ、奉公會の設立が5月1日であるから早期の取り組みといえよう。聖ニコライ日記は記す。

《1904年（明治37年）2月14日》

「…我々の教会の者達は戦争のために寄付金募集の件で会議を開き、この募金を担当する多人数からなる委員会を選出した。そしてもう一つ新しい案を考え出した。少なくとも十人以上の娘と若い婦人から成る会を作って、傷痍軍人のために病院に派遣し、傷を負った軍人達の親兄弟への手紙を書いてやるようにする、というのだ。この婦人達の会のことを軍事関係庁に申し出るという。おそらく赤十字の組織に入れられることになるだろう。…」

《1904年（明治37年）4月1日》

「…多田という苗字の信者がいる。彼は牛を飼って牛乳を売っていた。ところが戦争が始まるや、ロシアの信仰の人間だ、つまり国の敵だということで、ほとんどの者が彼の牛乳を買うのを止めてしまった。しかしそんな事で彼の信仰の熱意はいささかも衰えなかった。…出征兵士の家族を助けるための募金が開始されると、多田は真っ先に相当な額の寄付をした。そして彼の息子は出征した。…」正教徒に対する嫌がらせの中、一般信者の意識の高かった記録である。

戦時奉公會の動きとして「正教新報」の広告欄に頻繁に掲載されるが、軍専用の「日露軍用会話」を作成して献納を行っており、明治38年には増補4版を献納している。上磯正教会に関し、「正教新報」（第561号：1904年（明治37年）4月15日発行）に「草履を百足と金六圓五十銭を献納。」との記事が出ている。自分たちが出来る範囲で農作業後の時間を見つけての努力は、敵国の宗教信者ではなく、あくまでも日本の勝利を願い、協力する態度を示している。

2. 「俘虜信仰慰安會」の活動

「正教信徒戦時奉公會」の活動の一環として、ロシア人捕虜の宗教儀礼などのために日本の正教会内に結成された組織で、津田梅子、本田庸一らの名前もみらる。これは故国を離れ捕虜となった人々のために、信仰上の慰安を与えることが目的である。「正教新報」（第580号：1905年（明治38年）2月1日発行）に「俘虜の待遇と国家の仁愛」と題して以下の文が掲載された。

「又茲に一言すべきは敵国捕虜に信仰上の慰安を与える目的を以て組織せられたる我が正教信徒の俘虜信仰慰安事業を一方より観れば、初代教会以来ハリストス教徒が常に俘虜の事を虜りたるこの教えの精神なる愛敵の徳義を具体的に実行する善行なり。…一方よりすれば我が帝国政府が文明的精神と至尊の仁旨とを体して敵国俘虜を待遇する方針に一致して是を翼賛助成する至要の事業なり。」

この会には常務幹事二名、役員六名を置き、日本各地に作られた収容所（最大29箇所）（北は弘前から南は熊本）に二十一名の司祭が派遣されることとなる。俘虜を虐待しないとのハーグ条約を遵守し、国際慣例法に基づいて行動できる国家になったことを証明するためである。とりわけ俘虜信仰慰安會事業をとおして、俘虜の信仰の自由を保障する役割を正教会は担った。

聖ニコライの日記の俘虜関係を記す。

《1905年（明治38年）4月18日》

「…復活祭に向け、捕虜用に卵を注文。五万八千七百五十九人に一人二個ずつとして全部で、十一万七千五百十八個。卵一個配達料込みで二銭八厘。…合計三千三百十四円七十三銭四厘。…」

俘虜の数が多い事や金品も含む多種多様な要求に応えねばならない、正教会の苦悩がみてとれる。

上磯正教会の献金記事として、「正教新報」（第595号：1905年（明治38年）9月15日発行）には、『「俘虜信仰慰安会事業費寄付金第二十七回報告」として有川教会が一圓十六銭を寄付した。』と記述がある。ちなみに函館正教会は四圓である。

○ 文盲俘虜への配慮

ハリストス正教会は文盲の率の高かった俘虜に対して、収容所の中で教育を進めている。当時のロシア帝国は多民族国家でありかつ農奴を含めた農民が大多数を占め、農業従事者としての労働に多くの時間をとられ、教育を受ける機会が乏しかったと考えられる。

聖ニコライの日記は記す。

《1905年（明治38年）4月16日》

「…スミノフ将軍からの手紙には、我が捕虜の中で20%が文盲だろうとある。…つまり六万三千八百四十四人の捕虜中、将軍の計算を採用すれば一万二千七百六十八人が文盲となる。…二人で一冊ずつとすると、六千三百八十四冊初等読本が必要となる。…」

《1905年（明治38年）6月16日》

「宣教団によって出版される文盲の捕虜向け初等読本が印刷され、発送を準備。一万五千部印刷された。…」

数多くのテキストの準備がなされた事が記述されており、苦労が多かった事が推測される。

各地の収容所で、この種の本を使い文字を読み書きがなされた。「松山捕虜収容所日記」には、兵卒の収容所に神学校出身の志願兵二人がおり、その指導で読み書きのレッスンは始まり、兵隊は進んで勉学に励み、急速な進歩を見せたこと記述されている。文盲の人々に対する、きめの細かい配慮が感じられ、国際的にも高い評価に繋がる事になる。

3. 目時神父と俘虜収容所

1) 目時神父の福岡通信

有川教会に退避していた目時神父に聖ニコライより、福岡の収容所への派遣の命が下る。聖ニコライの日記《1905年（明治38年）2月3日》は記す。

「…アンドレイ目時司祭とその妻が来訪、九州の福岡及び大里の捕虜に奉神礼を行うためである。新聞報道によると、大里に 一千九百六十四人、福岡には九百九

十九人。…」

目時神父は俘虜信仰慰安事業のため九州に赴いている時に、「福岡通信」と題して「正教新報」に全11回にわたり、収容所等の様子を掲載している。最初の通信は「正教新報」（第584号：1905年（明治38年）4月1日発行）であり、最終は「正教新報」（第606号：1906年（明治39年）3月1日発行）である。

第一報の「福岡通信（目時司祭報告）」は「正教新報」（第584号：1905年（明治38年）4月1日発行）の記事には2月23日から3月5日までの記録を掲載している。抜粋を以下に挙げる。

『▲2月23日：福岡収容所にて祈祷執行候、同日祈祷日に付き所長殿より相談有之今後毎週一回に致候、即第一週は日曜、第二週は火曜と云ふ順序に御座候。▲小倉行：二十七日…小倉に到り…▲3月4日：永眠せし俘虜四十日墓参に関し所長殿に誓願の次第ありて収容所に到り…』

第五報の「福岡通信（目時司祭報告）」は、「正教新報」（第589号：1905年（明治38年）6月15日発行）の記事に5月11日から5月24日までの記録を掲載している。抜粋を以下に挙げる。

『▲5月15日：午前九時福岡上橋収容所慰問のこと及び箱崎収容所に於て病者のために祈祷執行詠隊者は中州収容所より随伴すべきことの諸件に付許可を受け申候。』

▲5月24日：午前箱崎収容所傷病者を慰問小十字架小冊子等不所持者に分興せり当日尚ほ俘虜傷病者二千名小倉より同収容所に移送せられたり。・・・』

第七報の「福岡通信（目時司祭報告）」は、「正教新報」（第591号：1905年（明治38年）7月15日発行）の記事に6月8日から6月28日までの記録を掲載している。

記録の抜粋を以下に挙げる。

『▲6月8日：午後二時列車にて小倉に出張

▲6月9日：午前九時日明収容所において聖体礼儀執行午後大里収容所に出張稲垣所長殿に面談せしに当時新海軍俘虜二千五百名せらるるしかし之は一時的にして近日中各所へ分送せらるる旨…』

この通信の冒頭には、目時神父の担当十箇所の収容人数の内訳が記述されている。

管轄は福岡、小倉、大里収容所と区分しているが、実際には福岡はさらに将校収容所、上橋収容所、中州収容所、箱崎収容所、箱崎病室、城内櫓収容所に分所されている。将校五十五名、下士官五百二十六名、兵卒三千百五十八名、合計三千七百三十九名である。

また小倉では将校収容所、日明収容所に将校二十名、

下士官百二十七名、兵卒八百七十四名の合計一千二十一名。小倉予備病院には四十名とある。さらに大里収容所には二百三十名と、総計五千三十名の捕虜のため十カ所を巡回する苦勞がしのばれる。

なお、陸軍省の統計（明治38年10月10日現在）では二万二千三百七十六名と収容人数が一番多い時期もあり、戦地と一番近い地理的な条件が考えられる。

第八報の「福岡通信（目時司祭報告）」は、「正教新報」（第592号：1905年（明治38年）8月1日発行）の記事に6月30日から7月14日までの記録を掲載している。抜粋を以下に挙げる。

『▲7月2日：午前九時將校収容所にて聖体礼儀及び「パニヒダ」執行せり』

▲7月14日：午前八時箱崎より俘虜永眠の通知あり準備を整えて出張せしに永眠者はカトリック教徒にて佛國司祭埋葬に執行せられたれば小生は幸に会葬せり…』

当時の福岡の収容所には、ロシア正教徒（41,487名）の他に少数ではあるがカトリック教徒（4,556名）、イスラム教徒（1,451名）、ユダヤ教徒（1,369名）がおり各宗教上の儀式を行っていた。

ちなみに「正教新報」（第595号：1905年（明治38年）9月15日発行）にはロシア正教に基づく葬儀の写真（小倉予備病院内俘虜の葬儀）が掲載されている。

第九報の「福岡通信（目時司祭報告）」は、「正教新報」（第594号：1905年（明治38年）9月1日発行）の記事に7月15日から8月3日までの記録を掲載している。

抜粋を以下に挙げる。

『▲8月3日：午後一時より箱崎収容所庭前に於いて埋葬の祈祷執行伍長イリヤ、ミチコフにて奉天付近の戦争に於いて…貫通銃創にて…四月二十九日来箱崎病院に於いて加療中…八月二日午前三時永眠せしもの…』

俘虜の埋葬祈祷の写真も掲載されており、俘虜の病氣見舞いや死亡時の儀式など、一人の神父の肩にかかる重圧は大きかったと推測する。

2) 福岡日日新聞⁷⁾にみる俘虜

目時神父が外向いている福岡の俘虜の様子を、地元の新聞は次のように伝えている。

●福岡日日新聞（明治38年4月6日）

『小倉の俘虜將校』の見出しで収容所の様子を俘虜の実名入りで詳細に伝えている。

「小倉俘虜収容所（偕行社）に於ける俘虜將校は一等大尉一名、二等大尉4名…。一等大尉 モイセンコは第三十七師団サモルスカ第四百七連隊付きと言へり、…。一等大尉 レオニス モイセンコ、二等大尉 イワ

ン ホミコワ…』

●福岡日日新聞（明治38年4月11日）

「○俘虜到着 俘虜百十七名某船にて昨日午後大里に到着の予定なりしが、到着の上今朝上陸検疫を終えて、一旦徒歩にて門司へ出て汽車にて福岡に回送さる可く其内二名の將校あり又一名の伝染病患者あり大里収容所患者室に収容さるるならんと。」

●福岡日日新聞（明治38年6月3日）

「○俘虜の暴行 ▲福岡上の橋の収容所 ▲消灯の不平等 ▲衛兵所への投石 ▲衛兵着剣 去る30日夜福岡上の橋収容所の俘虜暴行の椿事あり今頗末を聞くにこの六七日前に當同収容所の第十一班舎に於て消灯時間後尚ほ点灯し居るものあるを発見したるを以て衛兵は彼等を消灯せしむべく命じたるに彼等はかえって不平の面を見し容易に消灯せざるにより衛兵はその不法を諭し…衛兵に向かいて靴を投げ付けたるものあり…衛兵に向かいて石を投げ付けたるものあり…非常喇叭を吹奏せしめ衛兵は着剣して突撃の姿勢をとり…目下取り調べ中なり…厄介千万の者と言うべし。」

暴行事件が起きるなど、収容所での暮らしが大きなストレスとなっていた事が伺われる。「上の橋収容所」以外の「日明収容所」では小舟で脱走したり、若い俘虜が、柵越しに日本の若き女性と手真似で遊ぶのをとがめた折りに、衛兵に襲いかかったと新聞は伝えている。

●福岡日日新聞（明治38年6月13日）

「柳町の俘虜登楼拒絶：…各地俘虜の自由散歩はある地域を限り時間をも制限し居れるが、多くは区域中遊郭地を含有せるより酒食に飢えたる彼等は散歩許可と同時に遊郭に入り、酒に飽き色を買わんとし、眼中利の外になき遊郭楼主等はこれを奇貨とし、間には歓迎優待せんと言う者さえある始末なるを以て、俘虜等は愈々不謹慎の度を増し、…福岡収容所の俘虜として同じ露助の瓢六魂、自由散歩を許されたる…必ず先づ柳町遊郭に浮かれ込まん。…満場一致して外出俘虜に対しては断じて登楼を拒絶するに決し、…流石に博多っ子と言うべし。」

遊郭で俘虜が散在したことは、四国松山の俘虜収容所でもみられた事で、市内を自由に散策するなどが保障されていた事が分かる。小倉では、高等女学校の授業参観（弓道など）・運動会見学、街では柔道の試合等が行われていた。松山でも、道後温泉入浴、相撲の見物やピクニック、運動会、芝居見物等があり、ロシアから看病に来た妻と借家住居で過ごすなど厚遇されていた。日本各地の収容所の食費も最初は日本の兵隊と同じく一日十四錢九厘でまかなっていたが、食習慣から開戦の7月には二十五錢に値上げし、最終的に日本兵の二倍の三十錢までになった。

目時神父が活動していた福岡では俘虜への厚遇ぶりが



写真3 楽器演奏の俘虜（松山捕虜収容所日記より）

伝えられているが、脱走や暴行事件など心労の多かった事も推測される。

IV. 日露戦争の終結とハリストス正教会

1. 目時神父の帰還

日露戦争下では、俘虜信仰慰安会の活動を精力的に行った。会そのものは、1906年（明治39年）2月を以て閉会となった。

「正教新報」（第511号：1906年（明治39年）5月15日発行）の記事では、函館正教会においては、目時神父慰労会と豊田伝教師が戦地より復員した歓迎会が4月16日に併せて行われ、三百有余名の参集で盛会であったと伝えている。

上磯正教会でも、同じく「正教新報」（第511号：1906年（明治39年）5月15日発行）に以下の記事がみられる。「○有川教会祝賀会：…目時司祭が俘虜信仰慰安事業の為め九州地方に出張せられ久しく御巡回なく…然るに平和克復の今日首尾能く事業の結了を得させられ、この度の復活大祭祝賀会にご臨席の栄を得たるは当教会信徒一同満腔の喜胸中にあふれ感謝に堪えざる所なり。祝賀会は馬場ゾシマ宅兄に開かる…豊田先生の戦地土産等ありて散会したりき。来会者一百内外と認められ当会希有の盛況なりき。」

いずれもハリストス正教会が戦争の困難な時期をやり過ごし、喜びを分かち盛会の様子が伝わってくる。

2. 俘虜の感謝の「凱旋旗」

福岡の目時神父の働きに対して、捕虜のロシア兵から目時神父への感謝の品として送別の際に一对の凱旋旗が贈られ、上磯正教会に現存している。手作りの凱旋旗である（ハリストス正教会はハリストスが悪魔との戦いに勝利した事を示すために凱旋の語を用いて、復活祭の際には十字架を先頭にその後ろに左右2つの凱旋旗を掲げて行進（『十字行』）する。）



写真4 凱旋旗

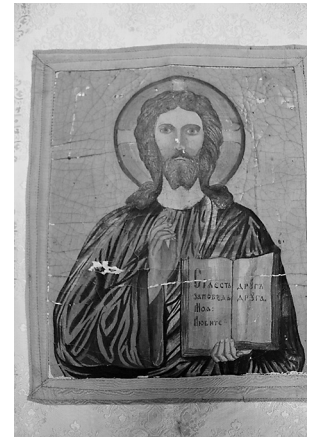


写真5 イコンの部分



写真6 福音書



写真7 ハリストス生誕



写真8 生誕



写真9 生神女（マリア）とハリストス

写真4のように凱旋旗は幅が60cm、長さが110cmある。写真5の凱旋旗の中央のイコンは、縦22cm×横18cmあり、表と裏の二面に聖画が描かれている。

聖壁の左側に立てかけている凱旋旗の表面には、写真5に示すようにハリストスが福音書を手に持っている姿が描かれ、その福音書には、写真6（写真5の一部拡大）に示すように教会スラブ語で「此我の戒也。互いに愛せよ」（ヨハネ福音書15章12節、マルコ福音書12章31節）とある。その裏面には、写真7には幼いハリストスと生神女（母マリア）と父ヨセフが描かれている。右側の凱旋旗の表面には、写真8のハリストスの生誕の様子が描かれ、幼いハリストスや生神女（母マリア）と父ヨセフの他に7人の人物が描かれている。裏面は、写真9

の幼いハリストスを抱く生神女（母マリア）が描かれている。俘虜の手作りで必ずしも正式にイコン画を学んだ構図となっていない画もあるが、素朴であるが温かみがあり、受けた恩恵への感謝の込められた凱旋旗であり今も十字行で使用している。

3. 講和条約の前夜

日露戦争終結に関し8月10日にポーツマスで日露講和第一回会議がもたれ、日本は12箇条を提出し、逐条審議に入った。その後9月5日に調印されたが、日本人は綱渡りで勝利した実態を理解せず各地で多くの反対運動が起こった。

聖ニコライの日記は記す。

《1905年（明治38年）9月6日》

「…『近衛兵が四十名宣教団を保護に参ります。』

『いかなる理由で』『市内で暴動が起きました。民衆が市内中騒乱をお越し、交番に焼き討ちをかけています』…民衆の怒号がしだいに近づいてきた。…鑄造製の門は重圧に耐えたが、ただ鍵が壊れた。…女学校や神学校の門で叩く音がした。ここもやはり兵士によって警備されていた。やがて群衆は、宣教団から一番近い交番の焼き討ちに向かった。それに彼らは成功した。…」

民衆の暴動の緊迫した様子が記述されている。日露講和条約が調印された9月5日に日比谷公園で講和反対国民会議が開催され、政府系新聞社や交番などが焼き討ちされた。その後各地でも講和反対大会がもたれた。北海道では小樽、函館でも抗議の大会がもたれ、9月6日には、東京及び府下五郡に戒厳令適用の勅令が即日施行された。

日本が列強と肩を並べる事が出来るとの錯覚が生まれた瞬間であり、国家が膨張し大正、昭和へと戦争への道を推し進める分岐点と考える。

さらに、日本の近代化とは別の視点でみると、列強と同様に植民地支配を推し進めて行く道である。韓国併合を例に挙げると明治9年の日朝修好条規に始まり、日露戦争と相まって韓国に対し（①1904年（明治37年）8月22日：第一次日韓協約、②1905年（明治38年）11月17日：第二次日韓協約、③1907年（明治40年）7月24日：第三次日韓協約、④1910年（明治43年）8月22日：韓国併合に関する日韓条約）へのプロセスで植民地化していく過程であり、必ず武力を背景とした。

V. 近代化に果たした正教会の役割

上磯正教会の成立過程及び正教会が関わった日露戦争への対応について、時系列の中で断片的に資料を検討した。明治維新以降、欧米列強とは不平等条約の下にあっ

たが、その解消を目的に、日露戦争の俘虜の扱いに関してはハーグ条約の遵守を朝野一丸となって進めていった。これにより国際的に一等国と認めさせ、不平等条約への解消への道筋をつけるためである。日露戦争後の1911年（明治44年）2月21日にアメリカと新通商航海条約を結び、始めて関税の自主権を確立するに至り、その後イギリス、ドイツ、フランスと条約の改正を進める。為政者は国際法上、俘虜に対する信教の自由を保障する為の方策としてハリストス正教会を利用した感がある。

一方正教会にとっては、日本にハリストス正教の教えを広めるために「正徒信徒戦時奉公会」及び「俘虜信仰慰安会」の働きをもって国に貢献した。後世の人は戦争に荷担したとの見方をするむきもあるが、単に戦争に協力したとみるのは早計であろう。迫害や敵がい心にさらされながらも、やっと芽をだした正教会を守り抜いた魂の強さや賢しさに想いを馳せるべきであり、特に上磯正教会のように小さな教会が地域に根付く為、豊かでない生活の中から金銭や物品を供したと事は並々ならぬ努力と記憶に留める必要がある。

敵国の宗教と見なされた（現在であればイスラム教徒=IS）ハリストス正教の教えを強力な国家体制から守るため、信仰を守らんがために様々な努力を積み重ねてきたのであり、「蛇のごとく賢く、鳩のように素直に」（マタイ10章16節）の教会活動である。逆説的には、明治国家の中で近代国家に必要な信教の自由を守り抜いたのであり、ハリストス正教会の教えを後生に伝えるために賢く振舞ったと考えるべきである。宗教は世俗とは違い精神世界を司るもので、聖書が語る「カエサルのはカエサルに」の精神世界を守りぬいたのである。

聖ニコライは講和条約に関して次の日記を記している。

《1905年（明治38年）9月3日》

「奉神礼の前に洗礼があった。…『講和』が上機嫌で祝われだしたが、私は彼らの上機嫌に答え、顔に微笑を浮かべることがどうしてもできない。『講和』のため憂いでいまなお心がしめつけられる。…」

聖ニコライが日本の勝利を素直に喜ばなかったのは、単に自国が負けただけでなく、戦死者への想いがあり平和を願ったのからではないか。戦争直前も日本を去ることが出来たにもかかわらず、愛した日本、信者の為に残った事は記憶すべきである。それ故、今後の日本の育末を憂えたのでないかと推測する。明治45年2月16日の聖ニコライの永眠は、明治という近代国家の終焉と重なる。明治と共に亡くなった聖ニコライの死は偶然でなかったように思われ、真の近代国家とは異なる膨張し傲慢となる国家への決別とも受け止められる。ハリストス正教会の教える愛とは異なる世界との決別である。函館

山要塞は太平洋戦争の終焉と共に役割を終え、今は廃墟となっている。一方、山麓の函館正教会は多くの信者の拠り所となり、上磯正教会も同様である。聖書が述べる「剣にて立つ者は剣にて滅ぶ」（マタイ福音書47章47-54）の言葉は多くの事を物語る。

VI. 今後の課題

1. 聖ニコライと内村鑑三の非戦論

ハリストス正教会は、日露戦争に関して協力的であったとの見方が支配的であるが、内村鑑三は万朝報（1892年に黒岩涙香によって創刊された新聞。簡単、明瞭、痛快を社是に一世を風び、明治36年・1903年には対ロシア非戦論派《幸徳秋水、内村鑑三ら》が退社して開戦論派が残り、世論形成に影響を与えていく。）を退社後に、「正教新報」（第563号：1904年（明治37年）5月15日発行）に非戦論を掲載している。国家の戦争政策を批判していた内村鑑三に、ハリストス正教会の機関誌が機会を与えるとはどのようなことであろうか。聖ニコライは明治36年から、内村鑑三主筆の「聖書之研究」を購読している。この関連から、単にハリストス正教会が戦争に協力的であったかを検証する課題が残されている。

ニコライの死後、内村は聖ニコライの二部屋の質素な暮らしに感嘆し、尊敬の念を示している。カトリックより伝統を重んじるハリストス正教会の聖ニコライとプロテスタントを更に推し進め、「無教会主義」を唱えた内村鑑三。神学上では両極で相反するように見える二人であるが、両雄相通じるエピソードである。

2. 山下りんのイコンの文化的価値

上磯正教会には、明治時代のイコン画家山下りんの描いた「機密之晩餐」（最後の晩餐）（写真10）が聖壁の中央に掲げられている。山下は明治14年に聖ニコライの命でペテルブルグの女子修道院でイコン画を2年間学び、日本に帰国後精力的にイコン画を描き、大津事件で負傷したニコライ皇太子にイコン画（エルミタージュ美術館

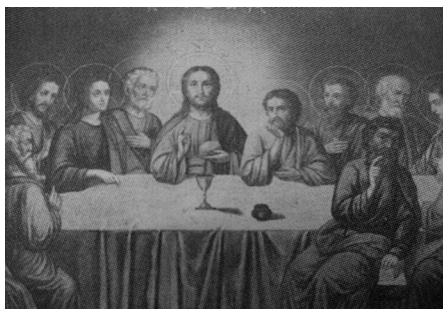


写真10 「機密之晩餐」

蔵）を贈るまでの技量を培っていた。

「機密之晩餐」は、明治27年に本会より、札幌正教会に会堂設立の際に贈られたもので、その後、上磯正教会の二代目の聖堂が昭和37年に完成した際に、札幌正教会より贈られたものである。このイコン画は一部のみにしか知られておらず残念なことである。今後は北斗市の文化財として位置づける運動を興すと共に、市民に広く公開する手立てを考えることは、宗教のもつ文化的な側面に光を当て、文化発展の一翼に繋がると考える。

引用文献

- 1) 石川喜三郎編（1901年）：日本正教傳道誌，日本正教会編集局
- 2) 上磯ハリストス正教会（1996年）：上磯ハリストス正教会120周年記念誌
- 3) 中村健之介監修（2007年）：宣教師ニコライの全日記，教文館
- 4) 日本正教会：「正教新報」（明治期発行分），愛々社
- 5) 島崎藤村全集3巻（1976年）：津軽海峡，筑摩書房
- 6) 陸軍省（復刻版）（1994年）：日露戦争統計集（15巻），東洋書林
- 7) 福岡日日新聞社：「福岡日日新聞」（明治38年発行分）

参考文献

- 1) 函館ハリストス正教会史（2011年）：函館ハリストス正教会
- 2) 聖ニコライ事蹟伝（復刻版）（1936年）：日本ハリストス正教会教団府主教庁
- 3) 函館ガンガン寺物語（1994年）：厨川 勇：北海道新聞社
- 4) 松山捕虜収容所日記（1988年）：F・クプチンスキー：中央公論社
- 5) 博多中州ものがたり（1979年）：咲山恭二：文献出版社
- 6) 「上磯ハリストス正教会」由来記（1996年）：落合治彦：箱館昔話（8号）

謝意：（函館ハリストス正教会ニコライ・ドミートリエフ司祭様，山崎ひとみ様）（上磯ハリストス正教会坂下洋光執事様，北海道大学スラブ研究センター）（平成29年5月25日・記）

上磯ハリストス正教会史（明治期）

西暦・和暦	司祭／執事	上磯ハリストス正教会・出来事	函館ハリストス正教会等・出来事	備考（出典など）
1858 (安政5年)	フィラレート ～1861(文久元年)		○初代露領事ゴシュケヴィツナ着任 (日露修好通商条約) ○シベリヤ小艦隊属司祭フィラレート	○「函館・ロシアその交流の軌跡」 (清水恵) 函館日口交流史研究会 ○ 同上
1859 (安政6年)	ワシリイ・マホフ ～1860(万延元年)		○領事館付属教会司祭 ワシリイ・マホフ	○日本正教傳道誌巻之壹・第壹編 ○函館ハリストス正教会史
1861 (文久元年)	聖ニコライ ～1872(明治5年)		○聖ニコライ函館着・7月14日	○函館ハリストス正教会史
1864 (元治元年)			○新島襄, ニコライと古事記を読む	○「函橋紀行」(新島襄手記)
1868 (明治元年)			○パウエル澤邊琢磨ら3名受洗 (司祭館居間にて5月30日) ○正教信徒への迫害 (沢邊琢磨ら仙台で逮捕される。) (開拓使・洋教一件)	○日本正教傳道誌巻之壹・第壹編 ○函館ハリストス正教会史
1872 (明治5年)	アナトリイ・チハイ ～1879(明治12年)		○切支丹禁制の高札を撤去 (2/24) (キリスト教の黙認) ○正教伝道学校を開設	○日本史総合年表(吉川弘文館) ○函館ハリストス正教会史
1874 (明治7年)	モイセイ・ コスティリョフ ～1875(明治8年)		○モイセイの動向	○ニコライ日記(1886・8/15)
同上	エフィミイ・ チェティルキン ～1875(明治8年)		○正教徒千葉卓三郎神仏不教の罪で 服役 ○エフィミイの動向	○日本宗教史年表 ○ニコライ日記(1878・5/31) ○ニコライ日記(1881・5/27) ○ニコライ日記(1886・8/15)
1875 (明治8年)	●有川教会	◎ダミアン五十嵐, 大村宅を講義所とする	○函館教会で日本初の神品機密が行われる	◎上磯町・宗教法人員規則認定申請書 ●上磯ハリストス正教会120周年記念誌 ○「上磯町史/年誌編」 ◎函館ハリストス正教会史
1876 (明治9年)		◎ダミアン五十嵐東三, キリール大村徳松の伝教で初の3名受洗(3月) ・イオアン大村萬助(佐藤由助) ・ペトル田中酉松 ・パウエル寺澤万之助 ◎ダリヤ大村里子(13歳)・ ○アントニイ田中の受洗		◎日本正教傳道誌巻之貳・第參編・ 貳章 「有川村の傳導並に教會の創立」 ◎「上磯町史/年誌編」 ◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌 ◎函館ハリストス正教会史
1878 (明治11年)	ガヴリイル・ チャエフ ～1882(明治15年)		○「正教新報」1号発刊(13年12月) ○聖公会デニング/有川/大野に布教	○「上磯町史/年誌編」
1880 (明治13年)	ドミトリイ・ スミルフノフ ～1882(明治15年)			
1881 (明治14年)	パウエル松本安正 (副伝教者) ～昭和7年	◎聖ニコライ, 有川に逗留。(ここには信徒が22人と信徒の家が五戸。) ◎ニコライ立花栄太郎, シモン坂下兼ソシマ馬場三之助の受洗 ◎イオアン佐藤由助宅の講義所手狭となる ◎会堂建築のため一升と献金の開始	○山下りん露へ留学(2年間) (ペテルブルク/復活女子修道院)	○「ニコライ堂の女性達」 (中村健之助/教文館) ◎ニコライ日記(1881・8/25) ◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌 ◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌 ◎ 同上 ○ニコライ日記(1881・8/8)
			○ドミトリイ体調不良	

上磯ハリストス正教会（北海道・北斗市）と日露戦争

1882 (明治15年)	ティト小松頼蔵 ～1891 (明治24年)			
1884 (明治17年)	●有川昇天会堂	◎初代会堂建立（主要部分・道産ヒバ材） （小松司祭の成聖：4月15日） （函館の信徒浦川が、建設工賃90円を献じる） ◎家具の寄贈（函館のエレナ酒井、い・スサンナ媚山） ◎信徒（11戸、57名）	○「裁縫女学校」を開設	◎上磯町・宗教法人数規則認定申請書 ◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌 ●上磯ハリストス正教会120周年記念誌 ◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌 ○図録「山下りんとその時代展」（1998年）
1889 (明治22年)			○山下りん「イコン」を描き始める	
1891 (明治24年)	ベトル山縣金五郎 ～1900 (明治33年)		○大津事件 ○山下りん／ニコライ皇帝に「復活」を献呈 ○ニコライ堂完成（東京・3月）	○「ロシア文化と日本」 ◎ニコライ日記（1891・8／6）
1893 (明治26年)		◎聖ニコライ、有川教会訪問（8月6日）	○「心海」発刊	
1894 (明治27年)			○東京駿河台より札幌教会に会堂設立により「機密之晚餐」が贈られる	
1896 (明治29年)			○当別にトラピスト修道院設立（10／28）	○修道院創立百周年記念誌
1897 (明治30年)		◎信徒（22戸、120名）		◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌
1898 (明治31年)			○「恐露病の風潮」 中野村人口（12月：207人） 清川村人口（12月：888人） 上磯村人口（12月：5,171人）	○「明治大正見聞史」（生方敏郎） ○「上磯町年表」
1899 (明治32年)			○学院セルゲイ（ストラゴロツキイ）北海道巡回	○「北海道巡回記」
1900 (明治33年)			○「要塞地帯法」の公布（7／15） ○「軍機保護法」の公布（7／15） ○函館山要塞工事完了（11月） ○山懸司祭の退任動向	○「函館市史」（年表編） ○「函館市史」（年表編） ○ニコライ日記（1900・8／21・22） ニコライ日記（1900・9／2・8・12・14） ニコライ日記（1900・9／16・18・25） ニコライ日記（1900・10／2・5・13・19） ニコライ日記（1900・10／26）
1900 (明治33年)	ベトル仮野成章 ～1901 (明治34年)		○中野村、清川村等合併して上磯村	○「上磯町年表」
1901 (明治34年)	アンドレ目時金吾 ～1912 (明治45年)		○函館要塞司令部を設置（5月）	ニコライ日記（1900・10／19） 函館市史（年表編）
1902 (明治35年)			○函館山要塞の火砲訓練 ○八甲田山雪中行軍遭難（1／24）	○「蝦夷日報」（34／7／21）
1903 (明治36年)	ニコライ・桜井宣次郎 （37年～38年） 義友長（佐藤由助）	◎降誕祭、七十名近くで祈禱を執行	○デンビー商会の正教会への寄付	◎「正教新報」558号（1月1日） ○ニコライ日記（1903・12／8）
1904 (明治37年)	伝教者イサヤ村木 （函館／有川／江差）	◎要塞地帯法で、目時司祭、村木伝教者、豊田伝教者らに退去命令（2／8）	○戦時祈祷書（戦時祈祷式の発行） ○恵山、白神に海軍望楼所設置（2／5） ○森、江差等に海岸監視哨設置（2／6）	○「正教新報」558号（1月1日） ○「明治期国土防衛史」（原剛：錦正社） 同上
		◎目時司祭ら、有川教会に連行される（2／9）	○要塞地帯法で露探に退去命令 ○露探17名、退去命令（2／8）	◎「正教新報」558号（3月1日） ◎「函館新聞」明治37年2月10日 ◎ニコライ日記（2月12・14・17日） ◎ニコライ日記（2月16）

<p>1904 (明治37年)</p>	<p>◎佐藤由助、牝牛一頭を教会に献ず</p> <p>◎有川教会発、日時司祭の動向報告</p> <p>◎日時司祭、有川で宣教始動／2月22日</p> <p>◎日時司祭、聖職者の派遣依頼</p> <p>◎日露戦争に伴う教会への迫害 (ダヴィッド田中太郎談)</p> <p>◎金六圓五拾銭と草鞋百足献納</p> <p>◎初めて教会歴どおりの復活大祭を実施(4月10日)</p> <p>◎「日時司祭退去取り下げ願い」報告</p> <p>◎豊田、村木の退去命令の解除(6月)</p> <p>◎日時、葬儀で一時帰函を許可される *退去者のヤコフ笠原の葬儀</p> <p>◎日時の退去命令の解除(8月)</p> <p>◎二名領洗、豊作、信者熱心勤め居れり</p> <p>◎豊田伝教師の入隊</p> <p>◎日時司祭／福岡へ派遣(ニコライの依頼)</p>	<p>○当別トラピスト修道院より、軍馬2頭徴発される</p> <p>○日露戦争勃発(2月10日)</p> <p>○露艦、青森沖で奈古浦丸撃沈(2/11)</p> <p>○「正教信徒戦時奉公会」の発足2/13</p> <p>○要塞地帯法による戒厳令(2/14)</p> <p>○軍艦高雄、函館港内の露帆船拿捕</p> <p>○露探容疑で高橋門三九、懲役8年(2月23日)</p> <p>○流行の毒語「露探」(木下尚江)</p> <p>○初の俘虜収容所開設(松山・3/18)</p> <p>○函館教会信徒長、長尾氏は恤兵金を海軍、陸軍、赤十字に献納</p> <p>○「俘虜信仰慰安会」の発足／5月</p> <p>○露探嫌疑への不安(函館)</p> <p>○函館教会事件で教役者、内務省へ</p> <p>○「日露軍用会話」の出版／献納</p> <p>○内村鑑三非戦論を唱える</p> <p>○福山沖に露艦出現、函館混乱(6/18)</p> <p>○ウラジオストク艦隊／恵山沖で汽船高島丸を撃沈(7/20)</p> <p>○黄海海戦(8/10)</p> <p>○遼陽の会戦(8/26)</p> <p>○遼陽占領、祝賀提灯行列(9/11)</p> <p>○旅順総攻撃(203高地占領)(11/26) (俘虜4万4千人)</p> <p>○島崎藤村「津軽海峡」発表(12月) * (函館近海、露艦隊への恐怖)</p> <p>○「軍用日露会話(増補3版)の献納」</p> <p>●大里俘虜収容所開設(1/10~10/29)</p> <p>●福岡俘虜収容所開設(1/14~翌1/25)</p> <p>○函館教会は2百名の参会者で盛会</p> <p>○「俘虜信仰慰安会」の動向</p>	<p>○「岡田普理衛師物語」(中村正勝)</p> <p>○「日露戦争」(小島譲・文芸春秋)</p> <p>○ニコライ日記(2月13日)</p> <p>○「函館新聞」明治37年2月13日</p> <p>◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌</p> <p>○「函館新聞」明治37年2月14日</p> <p>○函館市史(年表編)</p> <p>◎ニコライ日記(2月21日)</p> <p>◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌</p> <p>○「露探」(奥武則:中央公論社)</p> <p>○「正教新報」559号(3月15日)</p> <p>○「正教新報」559号(3月15日)</p> <p>◎ニコライ日記(2月26日)</p> <p>○「日露戦争統計集/15巻」(陸軍省編)(東洋書林)</p> <p>◎上磯ハリストス正教会120周年記念誌</p> <p>◎「正教新報」560号(4月1日)</p> <p>◎「正教新報」561号(4月15日)</p> <p>◎ニコライ日記(4月20日)</p> <p>◎「正教新報」562号(5月1日)</p> <p>◎ニコライ日記(4月20日)</p> <p>○「正教新報」562号(5月1日)</p> <p>○「正教新報」563号(5月15日)</p> <p>◎「正教新報」563号(5月15日)</p> <p>◎ニコライ日記(6月6日)</p> <p>◎「正教新報」565号(6月15日)</p> <p>◎函館ハリストス正教会史</p> <p>○函館市史(年表編)</p> <p>◎「函館新聞」明治37年8月5日</p> <p>◎ニコライ日記(1904・8/6)</p> <p>◎「函館新聞」明治37年9月11日</p> <p>◎「正教新報」571号(9月15日)</p> <p>◎「正教新報」577号(12月15日)</p> <p>○島崎藤村全集3(筑摩書房)</p> <p>○「正教新報」578号(1月1日)</p> <p>○「日露戦争統計集/15巻」(陸軍省編)(東洋書林)</p> <p>○同上</p> <p>◎ニコライ日記(1905・1/22)</p> <p>○「正教新報」580号(2月1日)</p> <p>○同上</p>
<p>1905 (明治38年)</p>			

<p>1905 (明治38年)</p> <p>伝教者イサヤ村木 (函館/有川/江差)</p>	<p>◎日時司祭、福岡へ出発</p> <p>◎桜井司祭の巡廻</p> <p>◎日時司祭：福岡/大里俘虜収容所派遣中</p> <p>●①日時司祭の福岡通信 (M38年2/23~3/5)</p> <p>◎日時：福岡/大里/小倉の俘虜収容所派遣中</p> <p>●②日時司祭の福岡通信 (M38年3/30~4/4)</p> <p>●③日時司祭の福岡通信 (M38年4/6~4/25)</p> <p>●④日時司祭の福岡通信 (M38年4/28~5/8)</p> <p>◎桜井司祭、厳齋袴を献じ十余名の痛悔者。 翌日説教後、数名の幼児と共に聖体を授く</p> <p>●⑤日時司祭の福岡通信 (M38年5/11~5/24)</p> <p>●⑥日時司祭の福岡通信 (M38年5/25~6/7)</p> <p>●⑦日時司祭の福岡通信 (M38年6/8~6/28)</p> <p>●⑧日時司祭の福岡通信 (M38年6/30~7/14)</p> <p>●⑨日時司祭の福岡通信 (M38年7/15~7/14)</p> <p>◎小倉予備病院で俘虜の葬儀を行う ◎俘虜信仰慰安会事業費寄付金27回 *有川教会寄付(壹円十六銭)</p>	<p>○奉天会戦(3/16:俘虜2万人)</p> <p>○大野村で戦死者の合同葬儀(3/18)</p> <p>●小倉俘虜収容所開設(3/21~11/28)</p> <p>○俘虜の動向①(新来俘虜物語)</p> <p>○十字架、小聖像、小福音書を贈文盲者に「露語伊呂波」初学読本</p> <p>○日時司祭の歓迎(福岡正教会)</p> <p>○俘虜の数(5/13・時点) (大里1,001)(小倉1,124)(福岡2,738)</p> <p>○「俘虜信仰慰安会」の動向</p> <p>○遺愛校長ハンプトン先生 要塞地帯法違反事件(5/14)</p> <p>○日本海海戦(5/28~27) (俘虜6千百人)</p> <p>○俘虜の動向②(俘虜暴行事件)</p> <p>○俘虜の動向③(登楼拒絶)</p> <p>○俘虜の動向④(市長歓迎行事)</p> <p>○恤兵品への出征軍人の感謝(7/23)</p> <p>○樺太の戦い(7/31俘虜4千3百人)</p> <p>○小倉予備病院内俘虜の葬儀(写真)</p> <p>○俘虜の動向⑤(最後の散財)</p> <p>○俘虜の動向⑥(送別)</p> <p>○俘虜の数(10/10・時点) (大里0)(小倉1,027)(福岡4,049)</p> <p>○俘虜(79,454人)を厚遇</p> <p>○日露戦争終結(9月5日) *日本・8万人の戦病死者</p> <p>○戦病死者(函館88/上磯7/大野6)</p>	<p>○函館ハリストス正教会史</p> <p>◎ニコライ日記(1905・2/3)</p> <p>◎「明治日本とニコライ大主教」</p> <p>○「大野町史」</p> <p>◎札幌正教会百年史</p> <p>○「日露戦争統計集/15巻」(陸軍省編)(東洋書林)</p> <p>◎「正教新報」584号(38年4月1日)</p> <p>◎「正教新報」584号(38年4月1日)</p> <p>○「福岡日々新報」(38年4月6日)</p> <p>○ニコライ大主教の弟子「鈴木九八伝」</p> <p>◎「正教新報」585号(38年4月15日)</p> <p>同上</p> <p>同上</p> <p>○「明治ニュース事典」 (毎日コミュニケーションズ)</p> <p>○ニコライ日記 (1905・5/11・12・13)</p> <p>○「函館要塞について」(遠藤芳信)</p> <p>◎「正教新報」587号(38年5月15日)</p> <p>◎「正教新報」588号(38年6月1日)</p> <p>○「福岡日々新報」(38年6月3日)</p> <p>○「福岡日々新報」(38年6月13日)</p> <p>◎「正教新報」589号(38年6月15日)</p> <p>○「福岡日々新報」(38年6月29日)</p> <p>◎「正教新報」589号(38年6月15日)</p> <p>◎「正教新報」590号(38年7月1日)</p> <p>○「日記に読む近代日本」</p> <p>◎「正教新報」591号(38年7月15日)</p> <p>◎「正教新報」592号(38年8月1日)</p> <p>◎「正教新報」594号(38年9月1日)</p> <p>◎「正教新報」595号(38年9月15日)</p> <p>◎「正教新報」595号(38年9月15日)</p> <p>○「福岡日々新報」(38年10月8日)</p> <p>○「福岡日々新報」(38年10月9日)</p> <p>○「日露戦争統計集/15巻」(陸軍省編)(東洋書林)</p> <p>○「日露戦争史」横手慎二(中公新書)</p> <p>○「英国特派員の明治紀行」</p> <p>○「明治ニュース事典」 (毎日コミュニケーションズ)</p> <p>○「日露戦争下の日本」R・シドモア著</p> <p>○日露講和条約締結</p> <p>○函館市史(2巻)、上磯町史(年史編) 大野(函館毎日新聞(M37/4))</p>
--	--	--	---

<p>1906 (明治39年)</p>		<p>●⑩日時通信の福岡通信 (M38年10/16~11/15) (正教新報604号にも同一の通信掲載あり)</p> <p>●⑪日時司祭の福岡通信 (M38年11/16~M39年2/2) *最後の福岡通信</p> <p>◎俘虜による福岡にて日時の送別会 (凱旋旗一対を贈られる：上磯教会所蔵)</p> <p>○ハリストス像と教会スラブ語の刺繍 (：此我の戒也。互いに愛せよ)</p> <p>○ハリストスの誕生、父母ハリストス</p> <p>○生神女(マリア)、ハリストス</p> <p>◎有川教会にて、日時司祭の慰労会 (4/23)</p> <p>◎「教会での教理談義の活発な巡回報告」 * (各地方教会巡回日記・石川残月：有川教会訪問)</p> <p>◎函館教会への復興支援</p> <p>◎「主教セルギイ(チホミーロフ)有川教会巡回」(5月)</p>	<p>○全国正教徒戦死者22名 ○日比谷焼き討ち事件(9/5)</p> <p>○東京府に戒厳令施行</p> <p>○函館で3千人講和への抗議集会(9/10)</p> <p>○小樽で3千人講和への抗議集会(9/12)</p> <p>○講和の記事で発行停止(小樽朝報)</p> <p>○要塞地帯法による戒厳令解除(10/16)</p> <p>○「正教信徒戦時奉公会」の解散(2月)</p> <p>○ニコライ大主教に昇叙(4月)</p> <p>○上磯村で戦死者の追悼会及び凱旋軍人歓迎会(4/22)</p> <p>○函館教会にて、日時司祭の慰労会(4/16)</p> <p>○「俘虜信仰慰安会」の解散/6月</p> <p>○函館大火で聖堂焼失</p> <p>○露函館領事館再建</p> <p>●聖ニコライ永眠/2月16日</p> <p>○セルギイ日本の主教就任(5月)</p> <p>○「正教時報」第1号発刊/11月</p>	<p>○ニコライ大主教の弟子「鈴木九八伝」</p> <p>○ニコライ日記(1905・9/5)</p> <p>○「宣教師ニコライと明治日本」(岩波新書)</p> <p>○「北海タイムス」明治38年9月13日 (○ 同上)</p> <p>○「庶民の見た日清・日露戦争」(大濱徹也：刀水書房)</p> <p>○函館市史(年表編)</p> <p>◎「正教新報」602号(39年1月1日)</p> <p>◎「正教新報」606号(39年3月1日)</p> <p>◎函館ハリストス正教会史</p> <p>○上磯町史(年史編)</p> <p>○「正教新報」611号(5月15日)</p> <p>◎ 同上</p> <p>○「大主教ニコライ師事蹟」</p> <p>◎「正教新報」623号(11月15日)</p> <p>○函館ハリストス正教会史</p> <p>○「正教新報」643号(9月15日)</p> <p>◎「正教新報」643号(9月15日)</p> <p>◎函館ハリストス正教会史</p> <p>○函館毎日新聞(2/18)</p>
<p>1912 (明治45年8月)</p>	<p>モイセイ白岩徳太郎 ~1941(昭和16年12月)</p>			



現在の上磯ハリストス正教会(三代目聖堂)